

連想式漢字記憶術

第一章

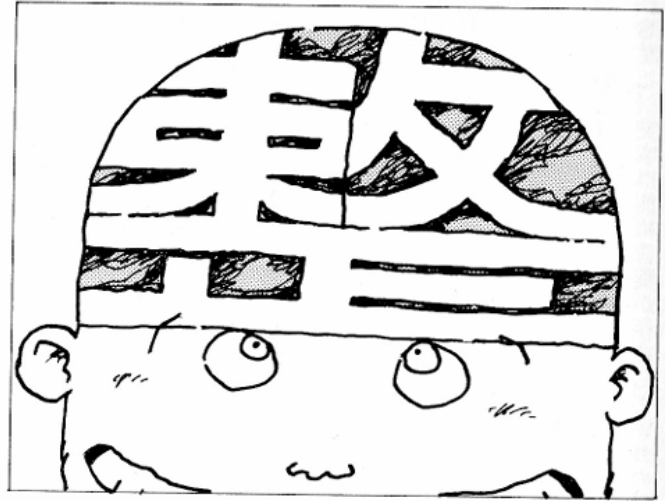
石井方式

漢字学習法の驚異的效果

漢字は余りにもひどく誤解されてきた

『漢字は字数が多い。漢字は字形が複雑である。だから、学習するのに大変だ……』そう言われて漢字は非難されて来ましたが、それは誤解です。山という漢字は、英語の mountain に当る word です。漢字、という名称のために、ローマ字と同列に考えられています。漢字はローマ字のような letter ではなくて、その集合体の word なのです。漢字が word であるなら、二千あろうと三千あろうと少しも多いことはありません。

漢字が word であることがわかれば、字形が複雑だという非難も誤解であることがわかると思います。漢字のアルファベットは『、 — — — — —』の五つしかないのです。つまり、mountain が、八つのアルファベットで組立てられているのに対し、山は、三つの — と一つの — と、計四つのアルファベットで作られていると考えられるのです。



整という漢字は一見複雑に見えます。しかし、この字は、英語の to put (things) in order という phrase に相当しています。put に当るのが 文、things に当るのが 束、order に当るのが 正です。整は、木を束ねた形の束と、手に棒を持った形の文とで、木の束の不正ろいな所を棒でたたいてきちんと正すことを表した字です。文 (put) 束 (things) 正 (order) と分けて並べないで整と一字にまとめてしまったため、複雑に見えますが、英語の to put (things) in order に当るも

のを一字にまとめてひと目で読み取れるように作り上げたものだから、決して複雑だという非難は当りません。

このように漢字の構造を真に理解するならば、漢字は最もアルファベットが少なく、字形も簡易で、合理的な構成の、世界で最も優れた文字であることがわかんと思います。だからこそ、学習が大変だという非難があるにもかかわらず、わが国の小学校は、世界のいずれの国に比べても、その半分以下の学習時間で母国語の学習を済ませているのです。欧米やソ連では、わが国の二倍以上の時間を母国語の学習に当てていますが、わが国よりも文盲が多いという事実、ローマ字による学習が漢字による学習よりもやさしいものではないことを、よく証明していると思います。

漢字はなぜ誤解されているか？

では、この優れた機能を持つ漢字がなぜ今まで誤解され続けてきたのでしょうか。それは、欧米の学者たちが、漢字の研究や理解に十分でなく、ただ文字として最も古い形式である象形文字を今もそのままに持つ漢字を、時代遅れの旧式な文字だと考え、象形文字から派生したローマ字は当然それよりも進歩した文字だと、単純に考えたからです。

しかし、漢字を表意文字と呼び、それを表音文字よりも劣った文字だと考えることが大変な見当違いなのです。表意文字と呼べば、非表音文字だと考えられるのが自然です。事実、欧米の言語学者、例えばわが国で最もよく知られているイギリスのムーアハウスは、その著『文字の歴史』の中で、『文字は言語に関係なく作られ、両者の間には何の連鎖もなかった』と述べていて、最初の文字は物事を直接に表していて発音を表していなかった

と指摘しています。このように非表音文字である表意文字から表音文字が派生した、と考えるので、これを発展だと見るわけです。

しかし、文字以前に言葉が存在していたのに、その言葉と無関係に文字が作られたと考えるのは不自然です。かりに、文字が言葉と無関係に作られたとしても、文字がその機能を果たすためには人々の共通理解が得られなければなりません。そのためには言葉と無関係でどうして共通理解が得られると言うのでしょうか。それよりも、文字は最初から言葉を表すために作られたものと考えるのが自然だと思います。発生と同時に消えてしまう言葉を保存するために文字は発明されたのです。だから、漢字は表音文字でもあるわけです。表意と表音とを兼ね備えているので、『表語文字』と呼ばれるべきものです。

非表音の表意文字から表音文字が派生したのなら、これを文字の発展だと考えることができますが、表音文字でもある表語文字が単なる表音文字になったのを、発展と考えるこ

とは無理です。そこで、表語文字からなぜ表音文字が生れたか、その間の事情をよく考えてみる必要があると思います。

それは、文字を持たない後進民族が、先進民族の文字を借りてこれで自国語を表そうとする時に必然的に生れるものだという事です。表語文字のもつ意味を捨てて発音を借りるか、反対に、発音を捨てて意味を借りるか、この二つのいずれかを選ばなくてはなりません。ところが、前者だと、自分たちが持つ音の数だけ（わが国では五十音、欧米では二十六のアルファベット）借りれば間に合いますが、後者だと最低二、三千字を必要とします。それで必ず前者が採用され、^(注)表語文字が表音文字になるのです。だから、表音文字は表語文字の発展として出現したものではなくて、それ以外に方法がなくて、止むを得ず表音文字となったのです。

その証拠は、表音文字は表音を目的とせず表意を目的としていること、表音は表意の手

段とされていることです。言葉の発音が変化しますと、発音と違ってしまった綴りを変えないでそのままその綴りを守っていることです。例えば、one という英語の綴りは、十六世紀におけるオウニーという言葉の発音を忠実に表したものです。その後、英語では一般に語尾の *o* は発音されないようになり、従ってオウニーという言葉もオウンと発音されるようになりました。しかし、その発音を忠実に表す *oun* という綴りには改められませ

「（註一） A は古くは *V* で、牛の頭、角のある頭を象った象形文字で、^{アレフ}「牛」^{ブエート} という言葉を表した表語文字。牛という意味を捨ててアレフの A という音を借りました。B は *B* で、テントを二つ連ねた形で、^{ブエート}「家」の象形文字。家という意味を捨ててブエートの *B* という音を借りました。アルファベットという名称は、このアレフとブエートを合せたアレフベートに由来する。あ（安の草書体）が、安の意味を捨ててアンのアという音を借りたいのと全く同じ成り立ちである。

んでした。文字は、何と発音される字であるかより何を意味する字であるかの方が重要ですから、発音を忠実に表す綴りに改めるよりも、従来の綴りを守った方がわかりやすいと考えたからです。今はさらにウアンという発音に変わりました。それでも初めの one という綴りを守り won とは改めませんでした。

このように表音的でなくなった表音文字の用法を、ムーアハウスたち言語学者は「表音文字の墮落」と呼んでいます。それは、表音文字が表音を目的とする文字だと思い誤っているためです。表音は、表意の目的を達成させるための手段に過ぎないことがわかれば、それが墮落ではなくて発展であることが理解できると思います。

英語の so と sow と sew、saw と soar と sore、これらは全く同じ発音の言葉ですが、発音に忠実な綴りは s だけで、あとは発音に忠実ではありません。しかし、忠実でないから意味が正しく伝達できるのです。このことは、欧米でもやっと最近になって理解でき

るようになったばかりです。^(注)『十数年前までは、言語学者の九十九パーセントまでが、発音を忠実に表していない綴りを改めて発音通りの綴りにすべきだと考え、綴字法の改正を主張していた』のです。それで、わが国の学者もそう信じ、そう主張して来たのです。

結局、表語文字が文字の理想なのです。漢字が発明されてより以来、表語文字としての形態を変えないでいるのは当然なのです。中国が一時表音化を目指しましたが、結局それを放棄しました。これも当然のことです。表音文字は、自ら文字を創作できなかった民族が不便を承知で採用した代用品に過ぎないのです。

² (註2) アメリカの言語学者、ノアム・チョムスキーの言葉。朝日ジャーナル Vol.8 #40 より

すばらしい漢字の訓読法

表音文字は、文字を創作できなかった民族が先進民族の文字を借りる時に必ず生ずる用法で、表語文字の代用品です。不便なのは当然であり、不便を承知で表音という手段に依っているのです。それでも長い間使用していますと、so、sow、sewのような「表意化」が行われ、だんだん使いよくなって来ます。

しかし、そんな表意化では満足できなくて、外国の文字を自国語の表語文字にしてしまった民族が、この世界にただ一つあります。それは私たち日本民族で、その用法は漢字の訓読と呼ばれているものです。つまり、漢字の意味を借りて、その音を捨て、その音の代りにわが国の言葉の発音で読むのです。

この用法は、表音的用法と違って、桁違いに多くの漢字の知識を必要とします。極端に

言えば、表音的用法では五十字の漢字を知ればそれで足りませんが、この用法だと、二千、三千の漢字を理解できてもまだ不十分です。

しかし、私たちの先祖は、その労をいとわずあらゆる漢字についてその意味を調べ、その意味に当る国語の発音をその漢字に押し込んでしまいました。これで、外国の表語文字がそのままわが国の表語文字になってしまったのです。

万葉集を見ますと

和我夜度爾 左加里爾散家留 宇梅能波奈 知流倍久奈里奴 美牟必登聞我母

というように、漢字を表音文字として使って書かれています。これがいわゆる万葉仮名です。わが国の最も古い言葉は、すべてこのような表音文字である仮字で書かれています。

ところが、同じ万葉集でも、中期以後になりますと、

橘之花散里乃 霍公鳥 片恋為乍 脇日四曾多寸

というような表語的用法が多くなっています。表音的用法だけで書かれたものは、何度も繰返して読み、考えてみませんと、全くその意味がわかりません。ところが、後者の例のように表語的用法が多く用いられていますと、実にその意味がわかりやすくなります。

私たちの先祖は、学習には安易でも、わかりにくい表音的用法に満足しないで、学習には大変でも一度身につければわかりやすくして便利な表語的用法を開拓し、ついに、三百年の間に外国の表語文字をわが国の表語文字にしてしまったのです。

このように、外国の表語文字を自分の国の表語文字に改造してしまったという例は、世界の長い歴史の中にも一、二あったに過ぎません。それも古い昔のことで、今はわが国以外には存在しません。外国の文字を、自分の国の表語文字として取り入れることは、理想的な最も良い方法であることがわかって、それが容易にできることではないからです。

ついでに言いますが、仮名は日本人の発明だと一般に信じられていますが、それは真実ではありません。中国人から教えられたものです。漢字を表音的に用いることは、中国では古くからあって、これを仮借と呼び、その用法による文字を仮借字と言います。略して仮字。字は国語では「な」と言いましたので「仮名」となったものです。

中国の仏典の中には、インドの言葉を表音的用法で書き表したものがたくさんありますが、それは全く万葉仮名と同じ用法です。中国ですでに長い間外国語を表記する場合に使用していた用法、仮借で日本語を表記することを日本人に教えてくれたものであることは、一点の疑う余地也没有せん。

だから、『日本人は、中国人も発明できなかった表音文字を作り出した。これは日本人の優秀さを証明するものである』という論をなす者がよくいますが、それはとんでもない誤りです。ただ、仮名が中国からの帰化人に教えられたものであることは事実ですが、教

えられなかったとしても、また、日本人が優秀でなくても、日本人は仮名を作り出しただろうとは思いますが。それは、すでに述べましたように、表音文字は外国の文字を借りる時に必然的に生ずる用法であって、すべての後進民族が例外なしに作り出しているものから。

従って、たとい日本人が仮名を発明したとしても、少しも自慢できることではありませぬ。それに比べると、山をやまと読む用法は、今まで当然のことのように考えられていて、これに特別の価値を認める人がありませんでしたが、これこそは大いに誇ってよいことなのです。

もう一つ、ついでに言います。同じ漢字を用いている国に韓国があります。同じ外国の文字を使用してはいても、わが国と韓国とは大変な違いがあることです。わが国では漢字を国語を表す文字にしてしまっていますが、韓国では中国語を表す文字のままこれを取

り入れています。韓国語を表すために漢字を借り入れたのではないことです。言わば、漢語に征服されたのです。わが国と違い、地続きの上に政治的な支配を度々受けたのですから、それは無理もないことだと思われます。

ともあれ、同じ漢字を使用していると言っても、わが国の用法は韓国と中国とも大変な違いがあることを理解しなければなりません。従って、わが国の漢字の使用について、中国や韓国と同日に論ずることは慎まなければならないことです。

漢字は言葉よりも覚えやすい

いずれ近いうちに精しい発表ができると思いますが、漢字の学習は、幼児が言葉を覚え始めるようになったら、すぐに始めるのがよいのです。言葉は、人類がこの世に現れた時

から存在したでしょうが、文字の発明は、人類の歴史の上ではごく最近のことです。だから、文字は言葉よりも高度のものであり、従って、学習するのにも当然むずかしいものだと、だれもがそう思っていました。

ところが、漢字のような表語^②文字は、言葉よりも覚えやすいことが、実験の結果明らかになったのです。言葉が覚えられない脳障害児や重度の精薄児でも、漢字は覚えられるのです。

言葉は耳でとらえるものであるのに対し、文字は、目でとらえる言葉、ということができます。目でとらえる文字は、とらえるまで待っていてくれますが、耳でとらえる言葉はとらえるのを待っていてくれません。

それどころか、発せられるや否や消えてしまいます。しかも、いくつかの音声が続々に現れては次々に消えていく、そういう音声を一つ一つ順序正しくとらえ、最後にそれらを

一まとめにし、その全体が何を意味する約束であるかを理解して、その音声全体と意味とを結びつけなければなりません。

このように考えてみますと、言葉を覚えるということは実に大変な仕事であって、決して容易なことではないことがわかります。

それに比べたら、漢字の学習など実にやさしいものだと言わなければなりません。漢字は初めから一つの図形としてまとまっており、それを確認し、記憶するまで、決して消え

② (註) これは表音文字ではだめです。必ず表語文字でなければなりません。また、同じ漢字でも、鳥や虫よりも、鳩、鶴、蜂、蟻の方が理解しやすく、覚えやすいことも明らかにされています。「蟻、虫、中」この三つの字の中では、蟻が最も覚えやすく、中が最も覚えにくいというのが幼児の漢字学習の実際なのです。だから、正しい漢字学習は、蜂、蟻を学習させてから虫の学習に移るのです。

てしまうことはありません。だから、どんなに能力の低い者でも必ず記憶することができ
るのです。言葉を覚えることのできない重度の精薄児でも漢字を覚えることができるのは
当然のことなのです。

言葉も文字も幼児期に覚えさせるもの

一家そろって外国に転住した場合、一番早くその国の言葉を完全に覚えて使えるようにな
るのは必ず幼児です。年齢が進むにつれて上達が遅れるのは今や衆知の事実です。幼児
は語学の天才と言われ、その学習は早ければ早いほどよいと言われています。

漢字の学習も同じことです。漢字は目で見る言葉であり、耳でとらえる言葉よりもとら
えやすいものですから、生後八カ月を過ぎたら、漢字を覚えることが可能になります。私

どもの実験によれば、幼児ほど無雑作に覚え、漢字を覚えることに少しの負担も感じませ
ん。幼児には、覚えようという努力なしに覚えられるのです。

韓国の金雄鎔ちゃんは、生後八カ月から漢字を教えられ、一年間に五百字くらいの漢字
を覚えていきます。この程度のこととは、天才でなくても、ごく普通の子供でもやればできる
ものであることが、私どもの実験で証明されています。

十数年前の文部省の調査ですが、中学一年生に対して行われた漢字力テストの平均読
字力は五百字に足りなかった、と報告されています。その程度の漢字力なら、幼児は二年
間で楽々と身につけることができます。

漢字力は成功のための第一要件

十数年も前のことですが、アメリカで大々的な国語力テストが、中学、高校、大学生から工員、会社幹部、社長にまでわたる四十万人の人に対して実施されたことがあります。その結果、学生の場合は学力の上下が国語力に正比例しており、社会人の場合は地位の上下、収入の上下が国語力と正比例していることがわかり、この人生で成功するための第一要件は国語力である、と発表されました。

私どもが普通、最も正確な知識を得ているところは書物ですが、その書物を読むための時間はどんなに多く得たいと望んでもそれには限度があります。人により読書時間が多いとか少ないとか言っても、その違いは五十歩百歩です。ところが、同じ時間、同じ書物を読んだからと言って、得る所は決して同じではない、ということです。それどころか、

その人の読書力の強弱によって、それが百にも千の価値にもなるかと思えば、十にも一の価値にもならない、ということがあるのです。

正確で豊かな国語力を持った人は、短時間の読書からすばらしい知識を引き出して吸収しますが、貧弱な国語力の人は、どんなにっぱな書物を長時間にわたって読んでも、正しい深い理解ができませんから、折角の読書も徒労に終わってしまうわけです。

漢字学習の秘訣

その国語力は、わが国の場合、漢字力が基礎になっています。深い意味を持った言葉の多くは漢語であり、それは漢字によって組立てられているからです。だから、あらゆる学問を進めていくための最も重要な基礎は、漢字の学習である、ということができます。

漢字は、すでに述べましたように、言葉と同じく幼児期に、生活の中で自然のうちに習得させるべきものです。しかし、幼児期に漢字を学習しないで過してきてしまった人は、これからどのような学習をしたらよいのでしょうか。

幼児は記憶力が強く、聞くものを見るものを片っぱしから無雑作に覚えてしまいます。こういう機械的な覚え方は、幼児期を過ぎると次第に衰え、代って論理的な覚え方が発達して来ます。従来の漢字学習は、機械的な記憶の衰えた子供たちに機械的な記憶を押しつけて来ました。

整という字について説明しましたように、漢字は論理的に作られていますので、漢字の構成法を知って体系的に学習していけば、覚えやすいばかりでなく、記憶が確実になり、それに何よりも学習が楽しいものになります。

大部分の漢字は、部首と呼ばれる部品の組合せで作られています。当用漢字は一八五〇

字ありますが、これに使われている部首は一九二個しかありません。一九二個の部首がいろいろに組合せられて、一八五〇字の当用漢字が作られているわけです。

だから、これらの部首の持つ意味や性格を知れば、当用漢字はもとより、それに数倍する漢字の意味や読み方を知ることができます。これからの漢字学習は、こういう漢字の構造を知って、体系的に論理的に進めていかなければなりません。それが漢字学習の秘訣です。これからそれを披露していきたいと思います。